

ほっく 平泉寺こぼれ話 ～第27話～
これは何でしょうか？



平泉寺からの出土品です。

ヒント

- ①. 陶器のかけらです。
- ②. 表面はざらざらしています。
- ③. 装飾は、ほとんどありません。
- ④. 平泉寺が栄えた中世の頃のものと考えられます。

答えは最下段↓

えちぜんぜんじょうどうたんぽうき
越前禅定道探訪記 その12

きじがみ きゅうせき
雉子神の旧跡

湯川の旧跡から白山の方向に約300m進むと林道小原線の終点にある駐車場に出る。この駐車場は大長山や赤兎山への登山者用に整備されたものである。

禅定道は、この駐車場から小原峠へ向かう登山道とかなりの部分が重なると推定される。

登山道を約1.1kmほど登ると、小原峠の手前の藪の中に、旧跡と思われる平場が出てくる。

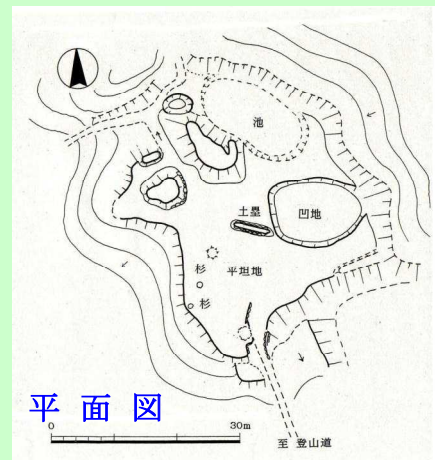
平場は、右図に示したように四角形で、東西約30m、南北約45mの大きさである。その中に土塁や池、石垣などが残る。これらの遺構は、石垣の積み方から判断して、近世以降のものと考えられる。

『続白山紀行』には、「峠より八丁下りて、雉子神の旧跡あり。昔、大師初めて山上之時、ここに至って道なくして行方知難かりしに、雉子出て衣の襟をくわえ案内せしという」とあることから、ここが雉子神の旧跡である可能性が高いといえる。

この遺構は上の写真にあるように、林道小原線の駐車場付近から良く見える。目印となっているのは直径70cm程の大杉2本である（写真矢印下）。旧跡に植えられた杉は、伐採すると罰が当たるとのことで、切られることなく、現在まで残されてきたのかもしれない。



雉神の旧跡位置図



平面図



雉子神の旧跡

答え 朝鮮でつくられた陶器で、壺や碗の破片です。

国史跡平泉寺の整備情報誌

平泉寺かわら版

No. 34 (2011年7月号)



【発行】 勝山市教育委員会 史蹟整備課
【発行日】 平成23年7月28日
【ご意見・ご要望は下記まで】
電話： 0779-88-8113(直通)
メール： shiseki@city.katsuyama.lg.jp

「平泉の文化遺産」 祝 世界遺産登録



岩手県 中尊寺金色堂



奥州藤原伝説が残る平泉寺白山神社

今号の内容

【特集】
奥州平泉と越前平泉寺の関係

【連載】
禅定道探訪記 その12
平泉寺こぼれ話 ～第27話～

特集 奥州平泉と越前平泉寺の関係

・先月、東北の「平泉の文化遺産」が世界遺産に登録されました。

奥州平泉は、勝山市の平泉寺と深いつながりがあるとされています。

とくに、奥州平泉の名は、勝山の平泉寺から名付けられたといった説もあります。

ここでは、奥州平泉と平泉寺の関係について説明します。

●平泉の名の起こり

奥州平泉は、藤原清衡^{きよひら}、基衡^{もとひら}、秀衡^{ひでひら}、泰衡^{やすひら}の四代にわたり栄華を誇った東北の都市である。この平泉は、陸奥^{むつ}の国を縦断して流れる北上川の河岸段丘上にあり、古代から交通や軍事の上で、重要な場所であった。

平泉の名の由来については、諸説あるが、中尊寺創建^{ちゅうそんじ}の地と伝えられる一関市「平泉野」から湧き出る泉に由来するという説、また、秀衡館の近くから湧き出した「酒の泉」に由来するという説、勝山の平泉寺から名付けられたとする説など、様々である。

平泉寺から名付けられたとする説は、平泉寺白山神社に伝わる天文六年(1537)に成立したという「霊応山平泉寺大縁起」に、「秀衡は、寿永二年(1183)に白山へ銅像2体を奉納し、平泉寺へは釣鐘を寄進した。そして、自分の住む城郭を平泉館と改め、その後、愛孫1人を平泉寺に遣わした。これが金台坊である」との記述に由来するようである。

●平泉にある白山社

東北地方には、平安時代から白山社が祀られていた。平泉にある中尊寺にも白山社があり、秀衡が建立した無量光院にも白山社が存在した。白山社は、北東の鬼門を守る存在として、東北地方にも分霊されて祀られたようである。

中尊寺の白山社は、能楽殿が有名で、そこで行われる能楽は、中尊寺最大の年中行事であったという。

●平泉町の中心部は白山の古称

現在、平泉町役場のあるあたりは、「志羅山^{しらやま}」地区という名前がついている。「しらやま」は白山の古称であり、北陸の白山との関係が注目される。



北上川と高館



中尊寺にある白山神社



中尊寺にある白山神社の能楽殿

白山麓と平泉寺に残る奥州藤原伝説

そこからみえてくるものは...

●白山麓に残る藤原伝説

白山周辺や平泉寺には、奥州藤原氏にまつわる記録や伝説が残る。

長寛元年(1163)に成立したという『白山之記』には、藤原秀衡が白山の山頂に5尺(約1.5m)の仏像を寄進したとある。

一方、美濃の長滝寺から白山への登拝道の途中にある石徹白地区には、「村人は秀衡の遣わした武士団である上村十二人衆の末裔^{うへむら まつえい}」との伝承がある。さらに地区に伝わる『上杉系図』によると、「秀衡は白山権現の本地仏2体の鑄造を発願し、石徹白と平泉寺に安置し、それぞれ神殿を造営した。そして、この仏像を運んだ上杉武右衛門は、再び石徹白を訪れ、そこに住み着いた」という。現在、石徹白に伝わる虚空蔵菩薩と平泉寺区の顕海寺に安置されている阿弥陀如来坐像はその2体とする説がある。

平泉寺では、先の「霊応山平泉寺大縁起」に記された内容以外に、背後の山中には奥州藤原氏が寄進した黄金の釣鐘が埋まっているといった伝承が残る。

●なぜ、白山麓に奥州藤原伝説が残るのか

文治元年(1185)の平家滅亡後、全国の覇権を手に入れようとする源頼朝の最後の標的は奥州藤原氏となった。

奥州藤原氏の三代目秀衡は、名馬や黄金を朝廷にたびたび献上して、中央との接近をはかり、東北の安泰を願っていたという。また、同時に多くの最新情報も得ていたようだ。

当時、奥州平泉と都を結ぶルートは、日本海沿岸や太平洋沿岸、さらには内陸を通るルートがあったとされるが、頼朝の影響下にある太平洋沿岸ルートは利用できなかったと思われる。

その頃、日本海沿岸地域から都に入るルートは、敦賀湊や小浜湊経由であったと考えられる。敦賀を含めた越前地域は、在地豪族の越前斎藤氏^{ちやうり}が大きな力を持っており、この家系から平泉寺の最高指導者である長吏や敦賀の気比神宮^{けひじんぐう}の長が出ている。秀衡は日本海沿岸ルートを確保するために、北陸の日本海側や北陸道に大きな影響力をもっていた平泉寺を含む白山勢力に仏像等を寄進したのだろう。また、このルートを通して、頼朝と不和になった義経と弁慶一行が奥州平泉に下っていったといえる。



白山三馬場



奥州平泉と京都を結ぶルート